
親の背中 1

リリ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親の背中1

【著者名】

20093F

【作者名】

リリ

【あらすじ】

私の今までをそのまま書いています。子供のいる方も、まだまだこれからっていう方も、自分の子供にこんな思いはさせたくないって感じてもらえればと思います。

17歳の夏、ふとタバコの煙を見て思った。

『私つて煙みたい……』

タバコの煙つて吐いた直後は見えてるのにすぐ見えなくなっちゃう
……消えていく。

私がいなくなつてもきっと誰も気にしない。

友達も……家族も……、

特に私の母親は……。

私の家族が壊れ始めたのは、私がまだ小学5年生の春。
小学5年生なりに普通に生きていた。

その頃、私は一階建てのアパートの一階に住んでいて下の階のおばあちゃんに可愛がつてもらつたり、隣のおじさん、おばさんにも家族でお世話になつていたぐらい、私にはたくさんの家族と呼べる人達ががいた。

たくさん的人に愛されている幸せもんだなあ……なんて思つていた私は、あまり家に寄り付かなくなつていた父は本当に仕事が忙しいんだけど、信じて疑わなかつた。

ある日の夕方……。

母が弟と妹を連れて買い物に行つている間、父が久々に帰つて來た。

『おかえり～』

父が『おう……』と答えるといつもの様にソファーに座り、いつもと

は違つ顔をして黙つていた。

沈黙に耐えられず自分の部屋に行こうとした時、父の携帯がなつた。

父が電話で話してゐる……。

子供ながらにも嫌な空氣を感じて自分の部屋に入った。

しばらくして父が入ってきた、手には携帯。
しかも私に差し出している……。

『誰?』と聞いても、

『いいから出なさい』と渡された。

仕方なく携帯を耳にあてると、女人人が泣いてゐる……。
意味もわからず気持ち悪い沈黙が流れる。

『……もしもし。』

向ひの女人人が少し驚いた感じで、

『リリ（私）ちゃん？？』

全く知らない人だし、喋る事もないから、ただただ黙つてた。

『リリちゃん、お父さんをくれない？』

『リリちゃんの弟か妹がいるのよ』

『赤ちゃんにお父さんがいなかつたら可哀想でしょ？』

……こんな話を父の顔を見つめながら聞いていた。

途中から何を話されてるのか、誰なのか、ナニが何だか分からなくて涙が流れた。

私が泣くと父は慌て携帯を取り上げ部屋から出でいった。

しばらく父の声が聞こえていたがいつの間にか終わってた。
私はひたすら母と弟と妹が早く帰つて来る事を祈つてた。

母達が帰つて来るなり父は普段通りに振る舞い、何事も無かつたかのように弟や妹と話し始めた。

改めて見ると、父と母がぎこちない感じで話たりしてるのが分かつた。

昔から父にはよく怒られた。

怒られてる理由が何だか分からぬ時もあつたり、子供なりにいつも気を使つてたのを覚えてる…。

…正直、小さい頃から父の事は好きとは言えない存在だった。

その日の夜は何事も無く終わり、また父は出かけて行つた。

そして父は帰つて来なくなつた。

父が帰つて来ないことを気にしなくなつたのは、私が中学生になつた頃だった。

毎日、友達と語つたり、ふざけたり、男子の事を相談しあつたり、部活に励んだり…。
中学生活をかなり楽しんでいた。

もちろん好きな人も出来て、付き合つて事も別れるつて事も学んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0093f/>

親の背中1

2010年11月13日03時10分発行